

Self-access system : 言語教育における 自己学習システムの新展開

投 野 由紀夫

1. はじめに

この小論を読まれている方々に「この10年間で外国語教育の関連分野で最も顕著な発展をした分野は何であろうか?」と言う質問をしたらどのようにお答えになるだろうか?ある方は普遍文法を基にした第2言語習得の分野を思い浮かべるかもしれない。あるいはコミュニケーション・アプローチを中心とした言語活動の変化を挙げる人もいよう。もう少し社会的な動きで言えばグローバル・イングリッシュなどに見られる英語の地位の変化もあるかもしれない。

しかしおそらく外国語教育の分野では、理論も実践もおおよそ大革命のような物はあまりなかったかもしれない。むしろ筆者が10年前と現在を比べて驚くのは、コンピューター、AV機器に代表される教育工学 (Educational Technology) の分野の驚異的進歩である。わざと「関連分野」という言い方をしたのはその故である。先日たまたま30年近く前のコマーシャルを見る機会があって、その時発売になったばかりの卓上計算機が当時の金額で16万円していたのを見て苦笑した覚えがある。今ではそのへんのディスカウント・ストアに行けば1000円以下で買える代物である。

まったく同じ事が現在コンピューターの世界にも起こっているのである。15年前には記憶媒体としてのフロッピー・ディスクなどは誰も知らなかった。発売した当時は高くて買えなかった。しかし今では1枚100円程度で買えるのである。コンピューターに至っては当時の処理能力の何十倍も速い機械がずっと安く手に入る。同様の事はAV機器にも言える。CDの登場であれほど普及していたレコードは消えた。デジタルという言葉が耳慣れなかったのが、今はDAT、ミニ・ディスクなどで個人レベルでデジタル録音をする時代な

のである。

このようなテクノロジーの急速な進歩に伴って言語学習の分野でもさまざまな活用方法やその効果が研究されてきており、その中で最近特に自己学習 (self-instruction または広義で self-access) の可能性が新たに注目されている。この小論では、まず CALL を中心とする最近の言語教育に関する教育工学の発達を簡単にまとめ、その将来像としてマルチ・メディアの self-access system の必要性を論じ、その具体的イメージを理解するためにシステムの心臓部としての新しい機能を備えた辞書の開発の重要性を述べたい。

2. 最近の言語教育とコンピューター利用

コンピューターの急速な進歩によって CALL (Computer Assisted Language Learning) の概念は随分浸透した。研究活動としても 1983年に TESOL に CALL Interest Section が設けられたり、テクノロジーと言語教育を結び付けるために CALICO (Computer Assisted Language Learning & Instruction Consortium) が米国で、1984年には英国で同様の趣旨で Micro Users in English as a Second Language Instruction (MUESLI) が設立された (MUESLI はその後 IATEFL に SIG (Special Interest Group) が出来るとそこに吸収される)。その後 TESOL でも IATEFL でもそれぞれコンピューター以外にビデオ教材の SIG も設けられ、世界中のビデオ教材のディレクトリーなどを作成している。

このような世界的な CALL への関心の中で言語教育に携わる教師達へのさまざまな啓蒙も行われてきた。初めのうちはコンピューターを言語教育に利用する事は悲観的な見方が多かった (Skehan 1985 ; Phillips 1985 など)。その意見の多くは、コンピューターを導入するコストに見合うだけの成果が期待できないのではないかという不安、初期のプログラムはかなり幼稚な物が多かったので CALL そのものの質に対しても疑問視する声が多く、何よりも教師が実際にコンピューターに触れた事がないというギャップが大きかった。その活路となったのは Lonergan (1991) によるとコンピューターの利用方法として最も普及した word processor を作文などに利用する事だったと言う。(その効果に関しては、Neu and Scarcella

1991などを参照) また CALL のシステム全体に関する提案もいろいろなされた (Last 1984 ; Underwood 1984 ; Phillips 1986) が、面白い事にこれらの著作はみな先端技術の進歩に提案その物がついて行けず、問題と思われていた事が技術革新で自然に消滅したり、提案その物が古くなってしまふという皮肉な結果が多かった (Lonergan 1991 : 5)。

このように見てくると、CALL の研究は実際はかなりハードウェアの進歩に依存してきた面があった事が分かる。それだけ80年代の前半ではまだハード面やソフト面でコンピューターは批判通りの不安材料を抱えていたのである。しかし、そういう意味では90年代を迎えかなりいろいろなメディアの統合をコンピューターが出来るようになった今、CALLの浸透で問題だったコストの面、プログラムの幼稚さの面、使う側のコンピューター・リタラシーの面などが大幅に改善されたことは事実である。90年代に入ってからいくつかの著作 (Rendall & Picciotto 1990 ; Dunkel 1991) を見ると、CALL の分野が相当マルチ・メディア化が進み自由度が出てきて読者にもかなりのコンピューターの予備知識がある事を前提としている事が分かる。この10年で CALL の分野はむしろ内容よりもハード面で条件整備が進み、その分飛躍的な進歩を遂げたと言うことができよう。

このような世界の現状を見た上で、特に日本の英語教育を考えた時どのような可能性を我々は考えるべきだろうか? 次の章では言語教育のための self-access system の開発の必要性について論じてみたい。

3. なぜ self-access system か?

3.1. Self-access system のイメージ

筆者が「自己学習システム (self-access system)」と呼ぶ時それは50年代に盛んにやられたプログラム学習のような物を想像されている読者の方もおられると思うが、それはまったく違う。図1に簡単なイメージ図を描いてみよう。

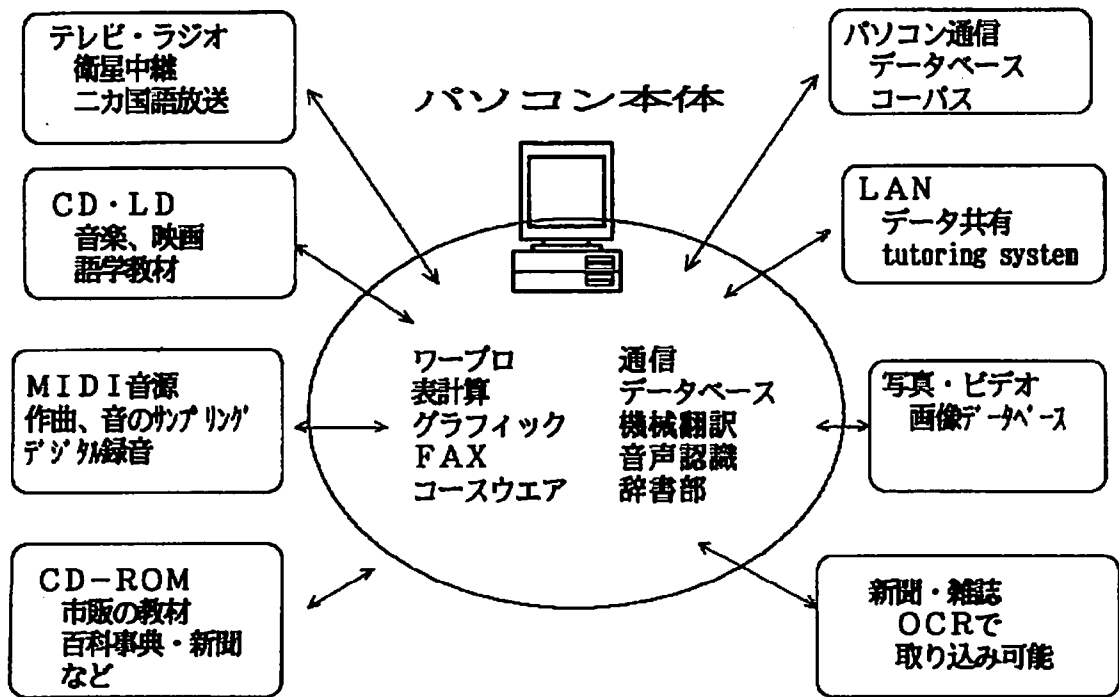


図1 self-access system のイメージ

実際はコンピューターをターミナルとして全てのメディアを一つに統合した物にすぎない。しかしこのシステムのイメージはただつながりただけではなく非常にメディアの加工が自由に出来る事を想定している。例えば今入って来たばかりのアメリカのニュースを衛星中継で見る。それを音声解析装置で瞬時に英文のテキストに落とす。そのテキストがすぐに呼び出せたり加工したりすることが出来る。レーザー・ディスクなども自宅に置いておらずにブロックバスター・ビデオか何かがデータベースを持っており、そこにアクセスすると画像が送られてくる。必要なところは許諾料を払ってクリップしてそれに自由にキャプションの出し入れが出来たりする。またこの頃には CD や LD もすべてデジタルで音源の加工が可能になっており、自分の歌いたい部分だけ声を省いたり、自分の話したい台詞だけ削ったりすることが可能になる。パソコン通信も相手の顔を見ながら自分の声を送ったり出来るようになるだろう。

夢のような話とお思いだろうが、これらのうちのいくつかはすでに実用段階にある。10年後くらいには当たり前になっているかも知れない。それではなぜマルチ・メディアのこのようなシステムにこ

だわるのか？ その必要性を考えてみたい。

3.2. 絶対量の少ない日本の英語教育

言語教育の理論の中で最近共通して言われているのは言語習得が学習者の主体的なメカニズムによって行われるということである。どのようなメカニズムかについてはいろいろな説明がある。Pienemannなどのように全ての言語がそれぞれ普遍的な習得段階を持っており、それは脳の認知的発達過程で情報をプロセスする制約が解除されることにより習得段階をクリアしていくのだという説（Pienemann 1984）もあるし、それをUGのような言語特有の装置を想定して説明する人（White 1989）もいる。あるいは社会言語系の研究者は communicative competence に代表されるような heterogeneous な能力を想定し、第2言語の中間言語が言語使用の環境によって careful style になったり vernacular になったりするような能力に七変化をする性格を持たせたりする人（Tarone 1983など）もいる。

このような中で70年代から80年代前半にかけて圧倒的に人気があり、かつその後徹底的に批判された人に Krashen がいる。Krashen は確かに自分の Input Hypothesis と呼ばれる理論において言語習得の5つの仮説を説き、いかにもこの複雑な言語習得のメカニズムを解明したかのように見せかけたのはよくなかった（Krashen 1985）。彼の仮説は第2言語習得の理論としてはあまりに理論的な武装が甘かったからである（この辺に関しては Gregg 1984 ; Larsen-Freeman & Long 1991）。しかしその後かわいそうなくらい叩かれた彼の仮説は、逆に言語教育の実践をしている教師から見れば直感的に歓迎したくなる物が多かった。例えばモニターという概念や affective filter などなるほどと思えるような説明なのである。実は理論的な整合性はなくとも Krashen の言ったことは言語教育の教室内では実際にあることなのではないか、と最近筆者は考えている。つまり言語教育の実践に立った習得に関する観察として提唱すればよかったものを「第2言語習得理論の決定版」と大上段に振りかざしたのがいけなかったのである。

彼の言ったことの中で私が日本の英語教育が傾聴しなければならなかったのはインプットの量と質の問題であった。Krashen はある一定量の適切なインプットがなければ言語習得は促進されな

い、と言った。これも理論的には comprehensible input とは何を指すかなど問題は多いのだが、理論としてより大きな事実として日本の英語教育がいろいろな教授法を試してもうまくいかないのは、うまくいくだけの十分なインプットが学習者に供給されていないからではないか、と筆者は思うのである。

第2言語習得をやる人は理論の厳密さを要求する。最近の UG-based SLA の人達は特にそうである。それはそれで非常に大切なことだ。しかし彼ら自身も言っているように、第2言語習得理論は実際にすぐ現場に役立つわけではない。それは認知科学の一領域として研究されるからである。むしろ言語教育に携わるプロの直感のような物の方がずっと実践には役に立つのかもしれない。だとすれば Krashen の警告したインプットの絶対量を確保することは(彼には不本意かも知れないが)むしろ言語教育に携わる者の実践から来る直感として聞くべきではなからうか？

少なくとも最先端の理論に触れながら筆者が思うのは、理論は理論でこつこつやらなければならないが、今日本の英語教育で必要なことは小手先の教授法云々ではなく絶対的なインプットの量の確保である、ということである。実際ある一定量のインプットに接していれば、学習者の側で自然に習得が促進されていくというのが最近の言語習得の考え方だからである。

このように考えてくると、もはや学校内の教育だけで言語学習環境を考えるのは無理である。AET だとかオーラルコミュニケーションだとか言っているが、あと10年経っても学校内でのインプットの量は爆発的には増えないであろう。それならば学校外のメディアをいろいろ組み合わせることを考えるしかない。幸い世はマルチ・メディアの時代である。学習者が英語に触れるモードは数え切れない。要はそれを学習者が興味を持って主体的に触れて行けるような媒介としての学習システムを構築することである。これが筆者が言語教育における self-access system を強調する理由なのである。

4. Self-access systemの特徴

4.1. 言語学習を促進するための工夫

ただ単にメディアをつなげて自由自在に加工すると言うだけでは

self-access systemというほどではない。そこに言語学習が個人で促進されるような仕組みを作らなければならない。その仕組みとして今後考えられるのは次のようなものであろう：

(1) 学習の動機を高める工夫

(a) マルチ・メディア化を図ることで authentic な題材を提供する

(b) computer game などと連携した言語学習を意識させない活動を考案する

(2) 自己学習を助ける学習内容の工夫

(a) 出来るだけ自然なコミュニケーションを志向した interactive な活動にする

(b) 心臓部としての辞書の機能を強化し、reference としてだけでなく様々な言語活動とタイアップしたタスクを供給することができるようにする

(3) モニター機能の充実

教師による monitoring が LAN やパソコン通信などで自由に出来るようにする

システム上で動かせるプログラムは大きく分ければ2通りで、一つは語学専用の courseware のようなもの、もう一つはニュースや映画など一般のソースを用いるものである。(1b), (2a)などは主として語学専門教材の開発に盛り込み、その他は一般的なメディアを前提に考えられよう。このうちで(2b)の言語活動とタイアップした辞書を心臓部に持つというのが今回の self-access system の最大の特徴の一つである。なぜ辞書なのか？ この部分に関してもう少し詳しく論じてみよう。

4.2. 言語活動を提供する辞書

Self-access system に辞書を核として位置づけたい理由は以下の点である。

(1) 生のメディアを素材として使う方が有効である

ますますメディアが多様化する現在、語学教材もビデオやレーザーディスクなどで教材が出されつつある。CALL の方でも courseware の開発はその主要な方向である。しかし筆者の考えでは10年先を考えても courseware 自体学習者が取り組んで

いて最高に面白い、ずっとやっていたいというものはなかなか出来ないという感じがする。むしろ現在でも教科書以外のリソースを豊富に持つ教師はたいてい英語の歌や映画など authentic な、素材そのものがよく出来たものを好む。学習者のレベル調整の問題さえクリアすれば、膨大な資金を投入した映画の方がストーリーも演技も面白さも格段に上であり、教材として魅力的なのは当然だ。

そう考えてくると courseware にいちいち語彙リストのようなものを付けるより、ニュースでも映画でも生の素材を直接教材として使い、語彙面はコンピューター内蔵の辞書に任せればいいようにした方が汎用性がある。辞書が非常に引きやすくかつ学習機能が完備すれば、ニュースや映画に取り組むこと自体がそれほど苦痛ではなくなるはずだ。

(2) 言語活動と辞書の連携がメディア活用の鍵になる

(1)のような理由で実際のニュースや映画・音楽・新聞・雑誌などのメディアを混合して教材として扱えると素材としては有効だが、問題はそれを活用したどのようなタスクが可能かである。次のような分類を考えてみよう：

(a)素材のテキスト全体を加工するもの→専用プログラムが処理

listening : i) dictation

ii) shadowing

reading : i) rapid reading

ii) cloze test

iii) paragraph reconstruction

(b)素材に含まれる単語・フレーズを加工するもの→辞書部で処理

タスクの中で listening comprehension のための T-F test を今聞いたばかりのニュースを素材に瞬時に作るというのは難しいので、そのような内容理解的なものは courseware で扱うしかない。しかし素材のテキストが入手できればそれを加工した聞き取りや読解の作業はプログラムを用意しておけばすぐ作ることが可能だ。これらはコンピューター内の「言語学習システム」的なところのメイン・メニューに登録しておいて、今聞いたニュースで dictation をやりたければそのプログラムを起動すればいいようにしておく。

したがって(a)タイプのタスクは辞書部で行うのではなく、独立した言語活動プログラムのような部分が扱う。

これに対して(b)のように素材のテキスト中の単語や熟語、句動詞、コロケーションなど語彙レベルで習得したい項目に関しては辞書部で扱う。実際中級以上の学習者の場合はほとんど語彙項目に関しての学習が中心になる。ニュースを聞いてある単語やフレーズを辞書で引いた際にそこで単に意味を確認するだけでなく使い方を知らるために具体的な練習が出来ればもっと効果的だ。そのような言語活動まで辞書部に組み込んでしまおうと言うのがこの self-access system の特徴である。そうすることで我々は courseware から解放され、一般のメディアから来る素材をフルに活用して言語学習できる環境を作り出せるのである。

もう少し言語活動を組み込んだ辞書のイメージを具体的に考えてみよう。次に示すのは未来のコンピューター版の辞書としては最低これだけは欲しいと思う情報一覧である：

	情報モード	活動モード
見出し語	a) 発音が聞ける b) 頻度表示がある c) syllabication に関する help 機能がある	発音練習が出来る
発音	a) 発音が聞ける b) 発音記号のための help 機能がある	発音練習が出来る
語義	a) メニュー表示になっている b) 頻度順、意味の発達順などが選択できる c) 英語の定義も階層化してあり参照可能	語義を理解するための和訳問題
文型表示	a) 文型に頻度別表示がある b) 文型一覧と用例一覧の switch が可能 c) 文型コードに関する help 機能がある	作文練習が出来る 文型に習熟するための練習問題

- 用 例 : a) 発音が聞ける
 b) 1文、dialogue、1段落 用例を使った複数レベルの作文練習
 など複数レベルの用例表示
 c) 用例にスピーチ・レベルがある 聞き取り練習
 d) 日本人のよくやる間違え例 複数レベルの読解練習
 e) idiom, collocation の表示
 f) corpus から用例を検索可能
- 視覚情報 : a) ジェスチャなどは動画情報あり
 b) ビジュアルイメージは階層化して出来るだけ与える
 c) dialogue の例などが映像で見られる 聞き取り練習
- 語 法 : a) corpus から用例検索
 b) ミニ文法書をhelp機能で読める

実際のコンピューター上でのモデルのようなものを見ないとイメージはわからないかもしれないが、このような語彙習得のための言語活動を辞書部に盛り込むことにより複数のメディアを駆使した言語学習をバックアップする汎用性の高いシステムを作ることが出来る。もちろん単に言語学習のためだけでなく、研究や論文執筆あるいはビジネスのための英語を駆使する人にもこのような辞書の必要性は高い。

5. ま と め

自学自習の実例や効果に関しては Sheerin (1991), 投野(1990)を参照されたい。Self-access system は決して学校教育を否定するものではない。むしろ Sheerin 自身も言っているようにこのような学習システムを備えた Self-access center を学校内に設置し、通常の授業以外に自由にそこで勉強できるようにすれば互いに enrich できるような役割を担えるはずである。このシステムを考案するには10年後くらいのマルチメディアの世界を見る想像力と思いついた発想が必要だが、ハード的には現在十分可能になりつつあるのでタスク開発などのソフトの分野でどれだけ基礎研究が進むか

にかかっている。CALL 自体がその有効性などを真剣に検証し始めている今、プロトタイプ作成など具体的な研究を進めて今後その成果を世に問いたいと考えている。

参考文献

- Dunkel, P.(ed.) 1991. *Computer-assisted language learning and testing: research issues and practice*. New York : Newbury House.
- Gregg, K. 1984. "Krashen's Monitor and Occam's razor," *Applied Linguistics*, 5, 79-100.
- Krashen, S. 1985. *Input hypothesis : issues and implications*. London : Longman.
- Larsen-Freeman, D.E. & Long, M.H. 1991. *An Introduction to Second Language Research*. London : Longman.
- Last, R. 1984. *Language teaching and the microcomputer*. Oxford : Oxford University Press.
- Lonergan, J. (1991) "A decade of development: educational technology and language learning," *Language Teaching*, 24, 1, 1-10.
- Neu, J. & Scarcella, R. 1991. "Word Processing in the ESL Writing Classroom," in Dunkel, P. (ed.) 1985, 169-187.
- Phillips, M. 1985. "Educational technology in the next decade," in Phillips & Skehan 1985.
- Phillips, M. 1986. *Communicative language learning and the microcomputer*. London: British Council.
- Phillips, M. & Skehan, P. (eds.) 1985. *Computers in ELT: Linguistics and Educational Contexts*. *ELT Documents* 122. Pergamon Press.
- Pienemann, M. 1984. "Psychological constraints on the teachability of languages," *Studies in Second Language Acquisition*, 6, 2, 186-214.
- Rendall, H. & Picciotto, M. 1990. *Making the most of microcomputers and interactive video*. London : Centre for Information on Language Teaching and Research.
- Sheerin, S. 1991. "Self-access," *Language Teaching*, 24, 3, 143-157.
- Skehan, P. 1985. "Introduction to computers in English language teaching," in Phillips & Skehan 1985.

- Tarone, E. 1983. "On the variability of interlanguage," *Applied Linguistics*, 4, 2, 143-163.
- 投野由紀夫. 1990. 「英語授業における自学自習の効果」『東京都立航空工業高等専門学校研究紀要』第27号 (1990), 139-145.
- Underwood, J. 1984. *Linguistics, computers and the language teacher*. Massachusetts : Newbury House.
- White, L. 1989. *Universal Grammar and Second Language Acquisition*. Amsterdam : John Benjamins.